

武蔵野日曜集会

霊と肉

——ロマ書第8章1～11節——

1996年6月16日(武蔵野)

小池辰雄

絶対者を相手に 真理の戦い 肉との戦い 天来の我 キリスト道 キリストの器 愛の霊
 キリストの中に生きている 人物列伝 烈々たる魂は死なない キリストの恵みの中に 直説
 法・現在の世界 キリストの直弟子

【ロマ8:1～11】

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2 キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。3 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。4 これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。5 肉にしたがう者は肉の事をおもひ、霊にしたがう者は霊の事をおもう。6 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。7 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、8 また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。10 若しキリスト汝らに在まざば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

●絶対者を相手に

昨日、私の東大の担任のご連中の還暦の会がありまして、そこに招かれて行つたんですが、私はその時に言いました。西郷南洲が「敬天愛人」と言った。ところが、この頃の民主主義はこの敬天の面が非常に薄くなつてしまつて、あるいは、もう無いと言つてもいいようなわけで、非常に私は嘆かわしく思う。西郷南洲が「敬天」と言った。それは絶対者に対するところの平伏しの気持ちです。その点で、南洲は明治の最初の先覚者です。今の日本



の民主主義は、民主の上に神主――神を主とするという面――が無いということをはつきり言いました。みんな、驚いたような顔をしていました。福音を受けとつてない連中が大方ですから、無理もないはなしですが。日本の民主主義というのは、こんなイズムにとらわれているようではだめなんだ。

「お前たちは信仰をもて」

とは言いませんでしたけれども。それぞれの分野でよく努めて働いている頼もしい連中なんです。けれども、大事な一つのものが欠けている。そういう意味で、先覚者の南洲のことを私が言うものですから、みんな、何を言いだすかと思つて聞いていたようです。

もう今はそういうように非常に平板になつてしまつてゐる。アブラハム・リンカーンは「アメリカの政治はアンダー・ゴッドである」

と、神の下におけるもののだとはつきり言いました。そういう、神を本当に相手とした――「天を相手にせよ」

とは南洲の言葉ですが――「神」とか「天」とかいう言葉で表わされている絶対者を相手にする面が今の日本のいわゆる民主主義の人たちには非常に欠けているわけです。

皆さんはお一人びとりが本当の伝道者ですから、おりにふれて

「聖書を読んでごらんさい」

と言つて、語つてやりなさい。明治天皇は聖書を読んだんですよ。そういう大事な面がおろそかになつてゐるから、どうぞ、勇敢にそういう戦いを、あなた方もなさってください。人に何と言われようと、何と思われようと、構やしない。今は遠慮してたらだめです。本当のことははつきりと言ふべき時なんです。日本の教育も、教育者自身がそういった大事な面が欠けているから、どうにもならん。私は、おりがあれば、どこの小学校でも中学校でも高等学校でも、話してやりたいと思うんですが、こつちから出かけていくわけにいきませんけれども。そんなことで、皆さんも、

「聖書はヨーロッパの本ではない。世界の大事な第一級の本だから、とにかく聖書を読んでごらんさい」

ということを大いに仰つていただきたいと思ひます。同じ同信のあいだで、秘密にしていたんではどうにもならん。やはり、一人びとりは伝道の使命がありますから、そういった使命的な存在ですから、どうぞ、勇敢に恐れなくこのキリストを証してください。

●真理の戦い

そうでないと、我々一人びとりがこの世を去るときに、

「われ汝を知らず」

とキリストに言われる。これは大変なことです。

「お前はよく戦つてきた」



とキリストに誉められなければだめです。これはミルトンがある所で言っている言葉です。そういうような生き方をしないでいると、神さまやキリストに、天国に行くことを

「ちよつと待て」

と言われる。そういうように「ちよつと待て」なんて言われたらしようがないんだ。やはり我々の生涯は、証し人、証者ということ、福音の証者です。

私は「福音」というよりも、「れいいん霊音」と言いたい。霊の音です。福というと、なにか幸福の福で幸せだと思う。しあわせなんていうものではない。キリストの弟子はキリストと共に苦しみ悩み戦った。戦いを共にしないではキリストの弟子ではない。

「わが弟子になろうと思う者は己が十字架を負いて我に従え」

とキリストが言ったでしょ。そういうわけで、男にしろ女にしろ、老いたるも若きも、同じ使命をもったのが本当にキリストの僕、婢なんです。

「我は平和を投ぜんために来たのではない。剣だ」

と、キリストは厳しいことを言われた。「剣」というのはそういった真理の戦いのことです。

「聖霊の火を投ぜんために来たのだ」

と。この聖書というのは非常にそういった戦いの書ですから、どうぞ、そういうことをお忘れなく、戦闘的な精神でやってください。そういった戦闘的なことをよく仰ったのは内村鑑三先生です。内村先生がそういった戦いの人であるということを私は学生時代に印象づけられた。藤井武先生はどちらかというと、詩人肌の方ですけど、内村先生は預言者肌の人ですから。どうぞ皆さんも勇敢にいいよい進んでください。

「平和を投ぜんために来たのではない。争いだ」

とキリストは言われたとおり、この福音は戦いの福音ですから。

●肉との戦い

今日の主題は「霊と肉」という。「霊」は神・キリストの霊です。そこらの霊ではない。

「霊をわきまへよ」

とパウロが言ってますが、天来の霊です。キリスト者は霊人なんです。神・キリストの霊をいただいている。それが存在の中心になっている。見えない、存在の中心は霊である。神の霊、キリストの霊です。お釈迦さんのほうは、だいぶ静かです。ところが、この福音の方は、聖書の方は戦闘的です。そういう戦いの消息です。

「生きる」とは戦いである「(リベール・エスト・ミリターレ)」

というラテン語の言葉がある。それはまず、自分自身との戦いです。それが今日いうところの「肉との戦い」です。

「肉」というのは、我々の生まれつきの我々を「肉」という。パウロが使っている「肉」というのはそういう意味です。生まれつきの自分というものを肯定しているうちはだめだ



と。己を自己否定して、己を棄ててかかる。正に棄身なんだ。生まれつきの自分を、我々一人びとりを「肉」という。生まれつきは別に悪いわけではないけれども、生まれつきの人間というのは自己肯定者なんです。自分自身を愛する。西郷南洲は言いました、「自分を愛するのはだめだ」と。キリストも

「己を憎まずばわが弟子になることができない」

と言われた。自分を、生まれつきの自分というものを否定してかかる。

●天来の我

そういう言葉は、誤解しては困りますよ。我々は、与えられた存在そのものは、これは非常に天地の恵みです。自分の家族の縦の関係もありましょうし、いろいろな意味において大事な歴史的な存在なんです。けれども、その歴史的な存在そのものをただ肯定しているだけではだめだ。もうひとつ大きな天来の我というものをそこにいただいて、そして、自己否定をしてかかったところに、自己否定をすると生まれつきの自分というものが逆に本当に活かされる。いい意味において活かされる。我々は空気ではないんだから。幽霊ではないんだ。だから、そういう意味においては、霊肉渾然とするんです。我々は霊肉渾然たる存在で、しかも、霊が中心になっている。我々は具体的な存在で、幽霊ではないんだから。キリストの霊がこの肉を善用していく、使っていく。否定というのも――生まれつきの自分をただ肯定したってだめだ――本当に否定してかかると、今度は逆にそれはいい意味で肯定される。具体的に、喉が渴いている人には水をあげます。お腹の空いている人には食べ物あげます。そういうものはみんなこの霊の世界の肯定的な愛の行為なんです。「愛する」というのは相手を助けるということです。感情的にただ「愛する」なんて言ったってだめなんです。具体的に相手を助けることが本当に愛するということ。お腹の空いている人には、何かおいしいものがあつたら、分けて一緒にたべる。きわめて常識的です。しかし、その常識的なものの奥にこの霊的な世界をもっていなければだめです。そういう人は普通はほとんどいないね。

●キリスト道

私は昨日の、東大の担任の学生たちの還暦の祝いの会で、そこまで徹底的に言いたかったけれども、まあ、言っても、聖書も読んだことのない連中が多いから、それはやめました。聖書というのは世界的な本ですから、

「世界的な本を、お前たちは読まないのか」

と言いたいんだ。キリスト教ではない。世界の本なんだ。キリスト道なんだ、道なんだ。自分でもって歩かなければ、その内容が分からないのが、このキリスト道なんだ。だから、私は「教」という言葉は嫌いだ。「教え」というと、「どんな教えか」なんて頭で考える。頭



で考えたらだめなんだ。道ならば、歩かなければだめです。自分で歩いてみて、生活してみて、そして初めて聖書がわかる。

そこらの牧師さんたちは何をしゃべっているか知らんけれども、武蔵野幕屋はそんなものではない。キリストの直弟子、パウロ、ペテロ、ヨハネ、彼らと同じようにキリストに直結している。我々はキリスト直結の人間です。媒介者はありません。イエス・キリストに一人びとりが直結している。

「千万人といえども我往かん」

という孔子の言葉がある。あの言葉は実は本当は霊的な人が言える言葉なんです。ジャンヌダルクという女性はそういう魂の女性だったね。最後に英軍に火に焼かれて死んでしまったけれども、あの生涯は立派なもんなんです。どうぞ、皆さんも、そういった戦人いくさびとですから。「福音」なんていったって、これは「れいゐん霊音」なんだ。

●キリストの器

「肉」というのは、生まれつきの自己肯定を「肉」という。これを否定してかかる。キリストの霊を生命の中心として――この霊は生命をもっていますから――そうすると、否定した「肉」が逆に本当に活かされる。そして本当の活動ができる。キリストの器として我々の肉は、身体は活かされる。否定の肯定とはそういうこと。私は観念論なんか言っているのではない。きわめて具体的なことを言っている。否定したものを本当に活かすものはこの霊なんです。キリストの霊、生命を与える霊です。小さき者を躓かせない霊なんです。

聖書の中にはそういったキリストの天的な声があふれていますからね――預言書もそうですけれども――本当に聖書くらい面白い本はないですよ。楽しくてしょうがない。力がないとしょうがない。ありがたくてしょうがない。聖書をなにか「教えの本」だなんて思うから大間違いだ。教えではない。キリスト教ではない。キリスト道です。絶対に教ではない。道なんです。

私はそのうちに、そういった角度の本を書きたいと思っています。私は今まで自分の書いたものを自家出版していたからだめなんだ。一般に知られない。教文館とかキリスト新聞社とか、ああいうものに頼んで、そこから出すようにしないとだめだね。もったいない。賀川豊彦さんが生きていたときに、私はそういったような連絡を――まだ若かったからです。私は近代の日本のキリスト教界の歴史の中で賀川さんが一番いい働きをした人と思っています。内村鑑三でも藤井武でもない。賀川豊彦です。彼はどん底から鍛え上げた人だ。病める人や苦しめる人やいろいろなどん底の人を相手に助けた。



●愛の霊

私の育った無教会の流れはまだ観念的だった。霊的な本当の信仰からは――内村先生は始めはそうだったんだけど――ずれてしまった。霊的な体験を否定してしまった。

「ちよつと行き過ぎたなあ」

なんて。行き過ぎはしない。まだ行き足りないんだ。私は若い時からいろいろなところを経ていますから、大体わかつています。

藤井先生というのはなかなか見当のいい方だったね。

「小池君のお兄さんは本当に惜しかったなあ。あの人は一人に一人いるかいなような、そういう存在だったよ」

と、藤井先生が私の兄貴のことを言われた。上司も

「小池政美の死は国家の損失だ」

と言った。そういう兄貴を私はもっていますから、この兄貴のそういった霊的な恩は、私は受け継いでいかなければならない。皆さんも、どうぞ、勇ましく戦いながら進んでください。福音というものはそういう戦闘的なものです。

「我は火を投ぜんために来たり」

と。我々はみんなキリストの贖いの十字架を本当に受けると、そのあとでは、聖霊がやってくる。聖霊は、私はこれを愛、霊と言ってもいいと思っている。愛の霊なんです。人を活かす、人を助ける、そういう霊なんです。ただ神聖なんていつているのではない。愛というの人は人を助けること、人を救うこと。具体的にですよ、感情ではない。愛というとか感情みたいだけれども、感情ではない。具体的になんです。キリストが「良きサマリヤ人」という話をされたでしょ。あれは具体的にサマリヤ人は旅人を助けた。

本当の世界は、あい対して語りまた聞くという世界です。福音の本当の世界は読む世界ではない。語りまた聞く、そういうのが本当の伝道なんです。

●キリストの中に生きている

では、ローマ書に入ります。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」

「に在る者」という言い方は非常に強い言い方です。「キリスト・イエスの中に入っている者」ということです。中に入っていないければだめですよ。キリストを信じたってだめなんだ。

「あなたはキリストを信じていますか？」

なんて聞かれたら、あなた方は

「私は信じてなんかいません。信じたって仕様がなし。私はキリストの中にいます」と、そう答えなさいよ。

「私はキリストの中に生きています。信じてなんかいません。キリストが神の子で



あることを信じて何になるか」

と。神の子たるキリストの中に生きているから

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、あなた方一人びとりは本質的にはそう言えるわけです。キリスト者というのは――「我を見し者はキリストを見しなり」ということ――キリストを信じている者ではないんだ。キリストが神の子であることを信じて何になるか。キリストの中に生きている。わが生命はキリストである。そういうのが本当の霊の世界です。

楽しいでしょ。この霊の世界は楽しいんです。楽しくなかったら本ものではない。何でも、やっていることが楽しくなかったら本ものではないんです、苦しいうちは。あなた方は何をやっていても、楽しくなったら本当なんです。「いや、しょうがないな」なんてやっているうちはだめなんだ。

●人物列伝

ベートーヴェンが、

「苦難を通して歓喜へ」

と言った。それも一つの真理だけれども、「苦しみの中に歓びがある」と、そこへいかなければ。ベートーヴェン自身はそういう人でした、その中にいました。しかも、それを歓びに変えることができた。シラーの詩をベートーヴェンが第九シンフォニーの終りの方で歌うように作った。

「相抱けよや千万の人々よ！」
ちよろず

くちづけ あまね
この接吻を遍く世界に！

はらから
同胞よ！ 星の幕屋のかなたには

みちち
愛の御父ぞ住み給う」

と。だから、みんな仲良くしろと。

ゲーテはもちろん聖書をよく読んだ人ですけれども、シラーの方がはつきりしていたね。ゲーテというのは幅がありすぎる。宇宙的な幅をもっているものだから。ゲーテというのは大きなやつですけども、そこへいくと、ダンテはいい。「地獄・煉獄・天国」を書いたダンテの『神曲』は素晴らしい。私は世界の最大の詩はダンテの『神曲』だと思っている。

イタリアはダンテを出ただけで充分だね。ドイツはゲーテ、フランスはユゴー、イギリスはミルトンか。政治家では19世紀の、グラッドストーンとリンカーンとビスマルク、この三人は偉大な政治家だ。みんな神を本当に敬った政治家です。日本にはそういう魂の政治家がほしいよな。その点で、西郷南洲はえらかった。南洲の伝記を読んでごらん、凄

いから。あの人は本当に深い人間だったね。人間味の豊かな人です。吉田松陰の辞世の句に、
「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」
むさし とじ やまと



というのがある。吉田松陰という人も偉い人だった。

私はいずれそのうちに、『人物列伝』（『霊界の星々』1998年刊）を書くつもりです。日本人は忘れてはならないような偉大な――偉大というのはただ偉大ではない――親しみやすい、親しまないではいられないような、そういった人物の列伝を書きたいと思っています。その中の最後の一人は賀川豊彦です。

●烈々たる魂は死なない

私はやることがたくさんあつて困るよ。自分の創作的な詩もあるしね。まだ、今は92歳だけれども、100歳を突破しなければ仕事が終わらない。ハハハ、本当だよ。この烈々たる魂は死なないです、なかなか。「先生もいい加減死んでもいい」なんて、冗談じゃない。モーセは120歳まで生きたね、モーセに負けないよ、そのつもりでいるから。「先生はあんなことを言っていたけれども、102歳で仆れてしまった。20歳ではなかった、2歳だった」なんて（笑）。冗談じゃないんだ。戦闘的な人は、その戦いの終りまでは、神さまは置いておく。皆さん一人ひとり、言葉の深い意味で、戦闘的でなければだめだ。ノホホンとしていたらだめなんだ。

「リベール・エスト・ミリターレ」（生きることは戦いなり）

という。スイスのヒルテューという人は非常に穏やかな方だが、しかし、あの穏やかなヒルテューも非常に魂は戦闘的だった。『眠られぬ夜のために』という有名な本がある。私はその翻訳もしました。旧制高等学校時代にヒルテューを愛読したから。今は、そういった第一級の本をみんな、先生も知らないし、若い人も読まないし、情けなくなるね。私は明治、大正、昭和、平成とだいぶ生きてしまったな。

とにかく、みんな、勇ましくやってください。このキリストの霊音をいただいた者は勇ましく行かざるを得ない。その中で一番、使徒で勇ましいのは、何といつてもパウロです。あのパウロというのはキリストに逆らっていたやつだったからね。キリストを信ずる者を迫害していたやつが、ダマスコ途上でひっくり返されて、三日三晩、目が見えず耳が聞こえずものが食べられず、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と、パウロは回身した。ただ心が変わったのではない。身体が、存在がひっくり返った。

●キリストの恵みの中に

ローマ書8章にもどります。

2キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。

非常にはつきりしたい言葉です。何も解説する必要はない。こういう聖書の聖言は、



繰り返して読む。そして、身につけてしまう。意味の世界ではない。現実の世界です。霊的現実の響きですから、それを自分の中に入れてしまう。それであれば、読んだということにならない。「これはどういう意味だ」なんて、意味の世界ではない。響きの世界です。音楽なんだ、霊、楽です。

³ 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。

「肉」というのは、生まれつきの我々と同じ存在のことを「肉」と言っている。

⁴ これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。

「律法の義」というのは、旧約のモーセの十誡から始まっている。その律法を一生懸命で守ろうというのが「律法の義」というやつです。守って、できたと思っている。けれども、それは結局、生命をもっていない。キリストの生命の律法、キリストの福音は、霊、音は生命をもっている。力をもっている。だから、何といても、新約聖書は旧約を乗り越えている。乗り越えて、旧約の悲願を全部、全うしている。イエスというひとは大変なひとです。

「我を見し者は父を見しなり」

と言えるひとですからね。あなた方一人ひとり

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言えるわけです。

「我がうちなるキリストが見えませんか」

と。それが本当の真者です。私は「信者」という言葉は嫌いだ。「キリストが神の子である」ということをただ信じて何になるか。

「私はキリストと一つです」

ということ、一つ、一如の世界です。キリストの恵みの中に入ってしまう。何も修養はいらない。ただ自分を投げ入れる。投げ入れたらキリストと一つにされて、

「キリストの生命が来てしようがありません、ありがたくてしようがありません」と、それだけのほなしだ。

私は簡単なんだ。私みたいな簡単な人間はいないかもしれないな。みんな、あんまり考えすぎる。あまり利口すぎるんだ。バカになるといい。私みたいにバカになる。自分をさげだしている。ひとつも体裁がない。

「あの人は立派なクリスチャンだ」

なんて、あの「立派」というのはだめなんだ。破れ器でいいんだ。立派な必要はない。

藤井武先生も「立派」というのが嫌いだった。もつとさらけだした人だった。塚本虎二先生もそうだった。あの人たちは本当にさらけだしている人たちだった。あの二人は内村鑑三先生の一弟子です。非常に型が違う。塚本先生は学者です。藤井先生は詩人です。



型が違っているけれども、魂はあい応えていた。

●直説法・現在の世界

⁵ 肉にしたがう者は肉の事をおもい、

生まれつきの自分を肯定しているものは肉の事をおもう。

霊にしたがう者は霊の事をおもう。

神の霊にしたがう者は霊の事を思う。

肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。

はつきり言っているね。「平和」でなくて、「平安」です。縦の関係は平安、人間の横の関係は平和です。「平和、平和」なんて言っているけれども、平安がなければ本当の平和はない。

⁷ 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わ^{したが}ず、否したがうこと能わず、⁸ また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。⁹ 然れど神の御霊なんじらの

中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん。キリストの御霊なき者はキ

リストに属する者にあらず。

ここは仮定的に書いてあるけれども、むしろ

「然れど神の御霊なんじらの中に宿り、給うがゆえに、汝らは肉に居らで霊に居る」と言いたい。私はもつと大胆な翻訳を書きたいと思っています。

「それはギリシヤ語の文法と違うではないか」

なんて言われたら、

「そうだ、違うよ。その奥の世界を書いているんだ。単なる訳ではない」

と言つてやる。

⁹ 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。¹⁰ 若しキリスト汝らに在ま^{からだ}さば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。

生まれつきの自己肯定によつて生きているようだけれども、実は死んでいる。

「霊は義によりて生命に在る」

です。「在らん」ではなく、「在る」です。神の御意を行うことが「義」なんです。この「義」というのは、ただ「正義」という意味ではない。非常に深い内容です。

¹¹ 若しイエスを死人の中より甦^{よみが}えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦^{からだ}えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

「活かし給わん」ではなく「活かしたもう」です。信仰の世界は現在・直説法の肯定でなければだめです。「……たまわん」ではだめだ。「……たもう」でいい。私はこんな「たまわん」なんて言われると、気がぬけてしまうよ、「たもう」と言ってくれなければ。「そういうこと



になるであろう」なんてではない。現実には本当に直説法・現在の世界です。本当の神交の世界は――だから信仰という言葉は嫌いなんだ――本当の信の世界は現在・直説法なんだ。私はそういった特別な訳ならざる訳を書きたいと思っている。やりたいことが多くて困ってしまう。なにしろ、文字の背後から力がくるような、光がくるような、そういった文章でなければだめなんだ。また、読むのも、そういう角度から読まなくては。

●キリストの直弟子

本当に情けないな。皆さん、戦ってくださいよ、

「聖書の世界はそんなことはありませんよ」

と言ってね。キリストを生きたパウロ、ペテロ、ヨハネ、あの直弟子たちと同じく、私たちもキリストの直弟子です。キリストは今もなお生きておられるから。世の末までも居られる、待っている。キリストは

「我はアブラハムよりも前にありしなり」

という。アブラハムよりも前にあって、また、黙示録のヨハネよりもなお後までキリストは残っておられる。この霊的な実在というのは大変なものだ。

パウロさんも私たちも同じことです。環境はみんな信仰のない環境です。だから、それを耐え忍び、更に突破していく。

「汝らは世の光なり」

とキリストは言われた。あなた方一人びとりは光なんだ。人には見えない。見えないけれども、凄いい光がある。キリストの光、光体なんです。光の存在です。

ありがたくて楽で力が来てしょうがない。そういうしょうがない世界です。本を読んでも、その作者よりもっと深い世界をそこでつかまえてしまう。なにも、聖書をギリシヤ語やヘブライ語で読まなくて結構です。日本語で結構。その奥の世界をつかえまえてしまうから。マルティン・ルターは聖書の本質を、その精神を捕まえていたから、ルターの翻訳は非常に詩的な力のある翻訳です。だから、その後、いわゆる学問的に正確な訳ができて、ルターの聖書にはかなわない。そういうもんです。

預言書も福音書もパウロの書翰も全部、本質的には詩なんだ。散文ではない。本質的には詩文なんだ。私は中学時代から詩が好きで、ロングフェローやテニソン、フィッチャーなどの英語の詩を読むのが非常に楽しかったね。

私は吉田松陰や西郷南洲、賀川豊彦という、霊的な本当に生きた人たちの列伝的なものを書きたいと思っています。それはキリスト教に限らない。仏教でも何でもいい。孔子でも何でもいい。とにかく、力一杯に生きたひと、己を本当に偽りなくさらけだした人たちの列伝です。

(独唱。『視よ此の人ぞ!』『ベタニヤなるある女』『主はサマリヤなる』)

